

58. 顔面神経麻痺の高気圧酸素療法

中田将風* 山下隆司* 渡部雄二*
 大村一郎** 五阿弥勝稜***与坂建市***
 (国立呉病院 *耳鼻咽喉科)
 (同 **内科)
 (同 ***高気圧治療室)

【目的】耳鼻咽喉科領域で、ある日突然に重要な機能障害をきたす本態不明の疾患に突発性難聴と顔面神経麻痺(とくに Bell 麻痺)がある。いずれも機能を維持する重要部分への血流障害が主因と考えられている。

従って、臨床の場においては、この両疾患はほぼ同じ治療概念のもとに治療が進められてきた観がある。

しかし、近年、突発性難聴に対しては高気圧酸素療法(OHP)がきわめて有効であることが立証され、評価も定着して久しい。

そこで私たちは、顔面神経麻痺について OHP の効果を検討することを試みた。

【方法】昭和57年4月より60年3月までの3年間に当科を受診した顔面神経麻痺104例中 Bell 麻痺60例に OHP を行い、日本顔面神経研究会の3段階40点満点法による評価基準を用いて治療成績を検討した。

また、電気生理学的検討も併せ行った。

【成績と結論】Bell 麻痺60例中、2週間以内に受診した新鮮例は54例、また2週間以上経過していた陳旧例は6例であった。新鮮例54例中、完全治癒したものは44例(81%)、軽度麻痺までに改善したもの7例(13%)、中等度麻痺まで改善したもの3例(6%)であった。また筋電図および誘発筋電図を行い、neuraplaxia と診断したものを Type I incomplete degeneration を Type II, complete degeneration を Type III と分類した。検査を行った27例中、Type I は13例、Type II は13例、Type III は1例であり、Type I 13例中完全治癒は12例(92%)、Type II では9例(70%)、Type III では1例(100%)、であった。

以上から、OHP は Bell 麻痺治療の手段としてきわめて有効であるといえる。

59. 各種脳神経障害に対する OHP (高気圧酸素療法)

上村孝臣 小松俊一 山口真澄
 奥井俊一*
 (財団法人朝霞厚生病院脳神経外科)
 (*慶応大学脳神経外科)

【目的】高気圧酸素療法(以下 OHP)の target は penumbra つまり細胞の崩壊はないが機能が消失した状態である。それでは cord の障害である外傷性視神経障害を始め各種の末梢神経障害あるいは神経炎に対し OHP は有効や否やを検討する。

【対象および方法】過去2年間当院で行った OHP 症例84例のうち末梢神経障害およびそれに類する計9症例につき分析した。内訳は外傷性視神経障害、三叉神経炎(ヘルペス)各2例、外傷性顔面神経麻痺、髄膜炎後第8神経障害、術後視神経障害(下垂体腫瘍)、外傷性網膜浮腫、Amaurosis fugax 後色覚異常各1例ずつである。OHP の方法は原則として1~2日毎、1クール20回、2ATA60分である。毎回視力等神経学的評価を行った。効果判定は著効(10回以内で著明な改善)、有効(1クール内で一定の効果発現)、やや有効、不変および悪化とした。結果として9例中2例が著効、2例が有効、4例がやや有効、不変が1例であった。今回はその効果のメカニズムが示唆的である外傷性視神経障害の2症例を中心に報告する。1例は19歳男子で受傷直後は異常なく、1週後より右視力低下(1.5→0.5)ありとりあえず保存的治療を行った。OHP は受傷17日目より始めた。9回目で1.0迄回復し得た。他例は30歳男子で受傷時右側全盲であった。3日後右視束管開放および視神経鞘切開を行い、視神経の一次損傷(出血、挫滅等)が強いことを確認した。視力は数日で0.1迄回復した。その後不変のため前者と同じく受傷17日目より OHP を始めた。しかし効果は不変であった。この例は視野欠損も伴っている。

【結論】以上の事実より当初無症状つまり一次損傷なり炎症が少ない症例は第一次選択として OHP が考慮されるべきであることが示唆された。